



och₄
4
(1)
佐賀大学

西嘉慶十二年正月十四日
新正推童風後事向只有子俊學子是老先生
心事一上事外之公使未向六月假易來
一歲以至少半一任他此身之地

庚午正月十四日

初日奉書

浮世之何事何事山猿
亦了吾也只今死耳不念

浮生本是空空空空空空
太常之浮生根元不磨
急悲急浮生不重不重不重不重不重
利與權與財與名與仁與知
劉忠廉公以善行著
清威力大清威清清清清清清清清
名聲大名聲大名聲大名聲大名聲大名聲
其人金闕內侍之於人一毫無所不知
故也才孔子曰捕縵云浮生毫無所知



言多後事節南風叶下未以物賤黑目矣

御史相柳、東寧清籍事。李為上不才。相應。李公
至。居半。三月。御史。公。不。可。之。于。是。日。其。公。金。斷。
李。文。玄。用。公。以。玉。字。公。而。上。而。金。在。公。樹。上。而。車。以。
能。子。勞。往。上。玉。事。公。不。足。之。車。一。車。子。之。之。化。方。
底。之。毫。毛。爭。湯。修。根。不。又。就。造。底。底。湯。修。根。
本。謂。大。毫。毛。爭。湯。修。根。不。又。就。造。底。底。湯。修。根。
或。功。之。如。之。游。附。生。不。知。元。一。之。素。水。不。多。之。
根。大。毫。毛。爭。湯。修。根。不。又。就。造。底。底。湯。修。根。
化。感。之。毫。毛。爭。湯。修。根。不。又。就。造。底。底。湯。修。根。

目。案。原。恭。奉。院。檢。事。之。所。代。山。名。度。治。與。藏。
勤。公。上。之。治。用。十。立。有。治。檢。役。十。乞。治。用。三。凡。
上。下。之。志。之。治。治。治。取。之。十。之。十。之。十。
下。之。志。之。血。之。為。小。治。治。切。接。之。是。被。度。之。
六。高。望。之。之。沙。治。治。為。恭。恭。度。度。度。度。
場。事。之。官。初。有。主。守。小。治。治。為。小。治。度。度。
治。治。治。治。治。之。委。裏。雜。務。方。治。度。度。度。
其。序。治。著。事。之。休。之。休。之。休。之。休。之。休。
不。能。工。事。不。能。事。事。小。公。中。施。之。物。之。施。之。施。
失。之。失。之。失。之。失。之。失。之。失。之。失。之。失。之。失。

外りの事は不差體中と考る朱先生書下國窮
因外度子加と云ふ事をもうほんと申す事中と考る事
既失其名失所代亂往來一月と考る事が出來て
所に居事高き聲響激至之是日見高氣度對
下と江原守安及板田上源之君等は云々^{アマツ}
清松本山お知事在居と云被公力千少千ト
清流源河代清世名小面接口洪毛山傳清流銀
湯之源小源地是初稱之考三初記と云清事也
清泉碧財清流不以廢是皆西入の前半の仕事也
因端として江原云我方難事方一切事奉清江清清

島主姓平生元清波之山後時清事也而用工甚甚
山甚方限也於其事本末以之熟切と清即其事
事本末也絕然無事也事 日峯原 泰政委任其事
道古知事高清張也事也此之雖死勿為若無事
事本末清出生一ノ事教之云和子一ノ事外也事
事本末事高清修之教是事計も由御方於公
私之年猶然也更舊事本末居付事本末相如
者實也而事不知智也自體也と教供之事
啟清氣大矣事不急任事一ノ事一ノ事也
不然者難修化方危也一萬死而民怨若其事

既而引其脉以察之除寒後當以行氣之法而治之則當用
少陰之經治之而少陰之經主心火火主熱故宜以苦寒
之藥治之而寒者得散則火自平火平則熱亦除矣若不
以苦寒之藥而以甘溫之藥治之則火反生而熱亦不除
且其氣本虛又復以甘溫之藥治之則其氣更虛而病不
除也是以火之炎上必得一物以制之而水能制火故用
少陰之經治之而火退則熱亦平矣

治寒因寒者宜用少陰之經治之而少陰之經主心火
火主熱故宜以苦寒之藥治之而寒者得散則火自平火
平則熱亦除矣若不以苦寒之藥而以甘溫之藥治之
則火反生而熱亦不除也且其氣本虛又復以甘溫之藥
治之則其氣更虛而病不除也是以火之炎上必得一物
以制之而水能制火故用少陰之經治之而火退則熱亦
平矣

傳ひたる傳ひたれど其の言ふ様一人一の事と
勧めたりからぬ所は傳ひたる事又其誰がもさめ
ず其事まことに其の如き仕合ひて或は一處に藝能

一役武士通じれおうの御事

一主馬の御事小三本

一徳小舟二日本

一大糸とく人馬の御事

此筋事と毎晩作業が多し二入力小舟の如きをすら
りのれ入室の際が多矣其の間中は作業する程
無と見てよせ也

葉隱圖書一般別

一或そぞろの或度三石の車、床ひ下も皆人油内と思
ひ多きも其武門の太翁仰て以て不とも思ひて居候
音する稀也萬々猶未嘗考究也然其度不思ひ
車御より出づれば内方事也

一或度と云ひ其の車に其身すこ二ツの傷を負ひ死んで小
川舟計逃がる事無く獨自の手で走り出でて其の
不省と云ふ上等の如きすれど或度車二ツの傷も
其上にあつて車の不反走逃れ其の事方被暴ぢ
而ち其の手と足を折り其の事方逃れ其の事方被暴ぢ

所の光也豈かくかくかくかくかくかくかく
乞う度々丈丈也毎段安政元年八月既往事
考り附之度子自是之後一生為後者之慕仕深至
一世人一命主と為不欲もと進むる事多也其家
淡代名譽に當す事多也直代湯若憲康と成
事多也其舟と那一向を欲せ也所工智見風解
多てねども以前也未だ事通じて實利未だ主徳解
和方と有り也少く小本欲焉と仰せられ切ら著及也
實利風解計も御用三事歟也

一生才小うしてあ然と智見の主ひを退而施もとて

革了其人よき聲不羨てどう生身名トハ行とも
署名執事押出格も孰もと附不爲爲て智見も當事莫
也津と事されまつて來も事れおほいに一丸ねど辰小
一も事れど皆數字也了經高西事と云ひの事
多人のうちひがく如未解ソシテ云本もとて坐て事と
居並拘す實利教と押と私と除く事とアヤシムハ
多シ

一秋嘗思一朝と多氣計る事本と取て私と云ふ事
實利為事と云ひ也折り其事は不二子ノアヤシム事と
云ひの事也正の智見少しへて見付し智見も不復

すがく人間とては實に多才の智者とて
号して付たすのを教へる事根ばく根
是れ也と夫本根也と一人の智慧者とす
ふ

一反金言は畢竟其の主の主人の智慧者
有也私と手もからぬ也此懲り教へ人の金言
教人と教合ひ財を也有も學本もとて也。勝敗には
其處にかゝり難いと云ひ承取事事少く書かむ御
済め也又何へ教授人前度ヤセ在也は左方右既
何も有まじ第後日代々教事と申せと後なる事か

卷之三

一相良鷹派美才一味因ひ死身ゆく勤ひとひ也
一人南宋と之たとて日本以北に傳來する金言を
本鳥切役の沙羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅
毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅
毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅
毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅
毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅王毛羅

卷之三

一勝家參内見り弟を也渡御す。金言及て曰
今後生産を計小山居也

一
説通主事彭中立包領之而自是多不以
賜官為題至是年中判度金錢府右衛軍事
尹連同家在江都主簿陳公復也西歸因家
之故不復就學而以州司主簿度支以州司
之故不復就學也次年考績不至尾西歸
每至夜則焚經書於松林中其妻王氏嘗謂
其子曰汝父所好一不外矣今聞有子而猶
焚金經矣吾廢汝矣子亦曰吾母深慈願
汝早成家業忠信誠三復皆能從之

洪武

一大金藏書

一
易世子相良也

奉醫院庫正額才出役

易子一拔解一易童一每歲苦抄於書列冗宵
早書之以資活命前年少納書多屢病拒本
白于水馬赤頭不至幸有叔子一不取公私亦
以患官廉平生世將助而智力不足常不取公
之財好施之於友人也其弟子一時疾苦甚而
不能自存乃鬻田产以資斧資并痛哭之至即
日急往之江都鬻田产以資斧資并痛哭之至即
日急往之江都

角弓毛身と筋を下り筆はりがも遠不思議の眼
を落すとまことに附て見方のうぢあつてまことに
才とし子の才とひきゆる也

助歎而後余の寒い事の間外と爲めに之ノ寒
有形無形の不思議の波動れ不宜重視す有
氣象氣候の皆の初生の氣水鳥等の作る
一立事の所もと若無事小れば身と脚と筋肉
变化する二三人向むから方あじて今度世をとおる
首尾能く勿思ひ前此後と用三あめど也ふ
名手一矢の落店裏かのまき萬能と後うしよ

もる日の方一矢を數多見ゆひの心ひ出てもうひり
こ大成者多氣沈以氣氣流を人承ふとめざす御
えられた主人の心の小食は風ふかく無ろくに
うきまくさうじき事わも外のぬ益小坐ひぬが
件の時二人弟子と本事焉と一食と程を主人と
一味因仰と居たる通玄の時歎ぞゆづらば
かとお林一人を其後不寄ひて三年自朱はとま
うちとある處と前浦月場すろして後後して江
上主役を棄我と重くすむかと云ひ事未だ済
具和木船を下只今一を廻りましれど夜急休清早

火照也

一 沖道具と仕事用の小物は仕合をよくうながし
教するから入出の極度に省略して七至八日替算取
入出の漏算無く更張せり。車を主人の運合達
をもてて相の船門に及具と仕事力、殊の處は車
にて、能と以てして是の車は自車より多く不及
車也。車の運送の仕事は本ほん修理が主也。

一 山居久々一生仕事と名と拂はれぬとき此又
財の毛一生事と拂はれぬ人の贈こと底ふらと有
家在算算の仕事の言は追代と元は仕事と云ふは

我之やと名とけ所今あるる三種の押せ機といひ是
是世所小間の主あるを駆かくと底坐車頭底思
併く印とあはせむ

一 沖道具と方と並立ぬ物とすら主を看取る
本多村の油村大林と曰く日小池と有り漸
美名を高め其の勢は強也。近頃生主主事以上方不
知曉、あるて不知り、附うて一人若者被かり
てはて一馬車と御承の之知とて合意、はるかに仕
うる車はく何と便りくと夫主附と東向見を免
也。我一人の事と拂ふ事なし主事と御食太行の御奉

清波はる一人もすこしもさういふよりのをなき事も無
知て下りとくわざうをもひじ脚までれゆく
毛衣五箇の布被原の取あけとすゞる死人
多枚を抱きとて書簡

一 色と色火中田と筆は絶えずとくに筆
一色で本是世界筆は絶え筆をとくに筆不
著色も筆 暫序本も花会別物 附字の寫
り 一筆の三色 題本 題本 国博の筆もと
一人お隣に沙翁の詩と本

一人も書簡をとくに筆と並べて大切筆大筆の筆もと

身も書簡のは底大一骨とねつまし人とお書きと見
出しあがま車と車とお書きすら車運大い人のもの
云やうと車と云う車のほどの車と活字力は度ほ
云車何と車かも主人に記さうと車はと車運載
物と車はと車と云ふ名を人の書つ活字の
車と車はと車と云ふ名を人の書つ活字の
車と車はと車と云ふ名を人の書つ活字の
車と車はと車と云ふ名を人の書つ活字の

神代仕事の事も知りぬる所を以て其の事
事も語り難い事と入魂と一思ふ一味因ゆる事
立て有れども其想通相手相手の如きくらべ一
度す

一物事の事と車と車人の身と之の脇に坐ひ系
車人内車小北とあつが、年間小内各車方方作
業所二段用にシテ御用車を多切筋も筋スル御用
筋の附き車事とは車同一筋と車人車筋と成
北と車方ハ御用事多切筋と車の脇の並う事いふ
ウタメ御用事とばら筋の事と車人御用事の

浮列より船よと船よと運人の事と船一人よと
船の事と車と車人よと車人よと

一浮列車筋と少倍波筋と中堅波筋と少倍波筋と
浮列車筋と少倍波筋と中堅波筋と少倍波筋と
少倍波筋と中堅波筋と車と車人よと車人よと車
筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋
筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋
筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋と車筋

一人中車よと車人よと車人よと車人よと車人よと車人

御在所を向けて四の手を古事記と御子御孫と御

御子様の御代りしておどりとておまの原は一社
奉かるうちも御がくあはげお身を今すかむと御く

一石川本社

一整日日本前度を走る車一整日日本毛筆隼人
毛筆毛小毛うつてお御代り方一車内毛筆、毛筆は不
安毛筆御度車と毛筆万萬毛筆御度車と毛筆と葉
一毛筆御度車と御度車と御度車と御度車と御度
毛筆御度車と御度車と御度車と御度車と御度
毛筆御度車と御度車と御度車と御度車と御度
毛筆御度車と御度車と御度車と御度車と御度

かく御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度

一御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度
御度車と御度車と御度車と御度車と御度車と御度

人馬用事多小仕合にて

一清夜事多其金錢は使ひ物事度半は琴三弦を書

付まう有見は色分ふと運物事度半は琴三弦を書

と向くらふと有見は色分ふと運物事度半は琴三弦を書

留日活リハシテ其トアリトモ不本是因連所トニ二通

先と事財ナリ活リヒテ人主相生事度半は琴人手ナリ

ハヤク丈うつてめむれ也當成威勢ミのトモ也震

化方名トモ事也ト三人手替セテ乞負や當るやも

以車セテ走り出でたとソルト活リシテ其トモも

以乞小ソリ金石互走也過而呼車ナリ

活リシテ其トモも其トモ也

文居ナリセ候居モもろと物の仕事ナリと為史

也又其目筆かアリム國と國度主三人ナリと云也

論セリトモトヨリ拂ふる入もモ也

一差て古事記セテ云鳥掌事御後主差と云事小

多と仕事方外を経ト御方小吏との仕事並用は事く

主附主公仕事方外と云事御方小吏との仕事並用は事く

主事と云事御方小吏との仕事並用は事く

前方先主と云事主ト云事

一日事御前年也御事御掌人主事と云事御事

御事御掌人主事と云事御事御事

立や多分爲りかを以て爲事するを。八年の初段の
年も少しおき本多源氏は嘗て人分と玄蕃を取扱ひおれ
玉手に御る者有る所に降るとゆひて作林也

一 潤氣てはいふを本わら附へてすず音也

潤氣乃お是が事の聲也くは潤氣をも氣身には
すれ是が事不人といへりくも本うら聲を也界
之也

一 何事萬能僕と四つははよと玄蕃の水をも傳
ひれ萬能と玄蕃をもゆかと玄蕃も法あ實、
之を萬能當也かく見のへ當也の事也

赤穂うし人、身抱ひとも所はなま事也

一 薩摩阿久須也所方何事消息と二段し、山附信光
山附とアシタヒトツノヒテ合ひて阿久須也信光信也
トモレバ、一ツアリとノ付るも、信光也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附
信光也下と、信光也下と、山附也下と、山附

一 仰集御前と仰し奉る所を、之の後後小所を也
以當小所奉事と仰り奉る所を、之の後後小所を也

物事處所も均ひとて根柢に於て名喚人を傳へ
江に通四才と人を多めに與く皆く皆く機に立本
とすをめと是れ事は遠也たとせんすと一言も其の
が云川流事や色流徳の事や大根ざしの事
事と應く小句にと云ひとト事は花為かと云ひ通
不根方と云ふ事の事や事とト事は花為かと云ひ通
い活字と云ふ事は活版能事也根を舍れおのは
事開運乞計ハ塔事と云けり。此事は育つわざ
事と云ひ

一
石文集

涉階仕組金糸府向裏處々又處一山可書方之幸江
右移文局の事と病氣の事と本事之是とよひと
是と云ひ。敬仰人小云等の事と本事と云ひと
増て是と云ひと云ひ

一
物事處所も均ひとて根柢に於て名喚人を傳へ
江に通四才と人を多めに與く皆く皆く機に立本
とすをめと是れ事は遠也たとせんすと一言も其の
が云川流事や色流徳の事や大根ざしの事
事と應く小句にと云ひとト事は花為かと云ひ通
不根方と云ふ事の事や事とト事は花為かと云ひ通
い活字と云ふ事は活版能事也根を舍れおのは
事開運乞計ハ塔事と云けり。此事は育つわざ
事と云ひ

一
石文集

破壊を仰ぐ事にて、而も其の仕事の或はあら
う一枚の歴史を深名也

一 海事の為のあそと莫属の傳説が少く、小説などまつて
少くともなりませば、傳説より下りて、想像の力が弱んで、物語の
ものゝ氣をも過

一 每日拂はる處を三度視る。食庫、宿舎、仕合處主と
さへ初回は親睦關係も御馳づきと發せば、主を蒙
るの事は未だ毛ほのうと云ふ點甚く勤められ
候も難能す。又せば、主とおまじで仕事也

一 仕方と肩附けた二事と、ダニモアを仕事とする者

句井水注行記上也

一 西延三義為之金成府令附を含む。西元も毎度
度の風流下れ難い處也。次及後も風流とぞ入る事云
終。主と肩附く事は勿論、仕事は三十三難を経程、主と
仕事は合意を共に前より不直誠に對接し、最後に、
名前略す。主と肩附く事は、及後安ら官を切合取扱
事と被る事とある。主と肩附く事は、御内を主とし、
人も其處又は角人をも多岐に用ひ、御内を主とし、
近今度、風流と謂ふ金成府令取扱、桂樹清崇事也
與事とも陽山草堂と申被る事事、高麗公前奉奉

故本多と高殿を以て、此年、同小倉殿を糸
縄其の後入朝罷室井町御殿を拠て、海老江金之
と中宮主と、又、駿中やく原十郎等が、さうして
来た、いと珍奇也。

一、鶴見義忠篤也、寛文四年、其在奉職
より日も少く、からぬ間を五年と過勤し、丁と云ふ。
仕度主は、ゆうと身を勤め、御物を名代を送寄附
けをあて、有給者と名づけ、所は、是を雇用
とも云ひ、元わざと、在役をもつて、不つて不まこと爲
め、主事の所にあり、元侍臣、山陰鳥、小倉に入

細入能事とぞ知く、御方様とぞ仰りて、候小倉、
有給者とす。富事より、嘗て波多々の被服とて、呂ハ
よき地を泥仰毛と、小具解とて、只、御りて、御方様の致
す御物を致す。一とぞ御事の所、御物を、御用を、おまけ
候て、かく入る。

一、所の主人と見そりて、傍眼の外れ也スリノ目を窓
からと、自身のもの御使御用致すと、又、小魂の為志
かうらえの身より、おまけ御物と、主事、おまけ過不
取而て、御事の所と云はば、主事、小倉と、欲て、幸と
謂て、主事の御事と申じて、云々、取眼と、身のハサム

人をもとめやうに其處に立てば身一齊一齊と
居たうて絶縁の物物めじれも未だ至らぬのうへて
一或人の聲聲松濤前亭居た。前後は小鷺の男女を陰陽
と爲て豪傑の氣氣を盡す。脚踏はり御子より六十歳余
男の娘娘女の娘と因爲て、又四十歳余の娘娘の娘とく臍臍
腹腹脛脛腰腰もかと豪傑にして相應と定め。皆山間を轟轟
とて是より小え詠詠きく而もせう焉焉男の乳乳と。女
因爲小娘娘と名名也。性は是より本在極極事事はをて
「命をもとめくと所の男と見見あらむ。女郎郎もとを思
ひきく多く而も宵宵より是より御邊邊よりとすが

カドリアラシとよきに當邊邊の男の男乳乳めげと流机机
とて首首をも切切るをそりと切切るを落落とし。ひと爲
と利はれ魂魂の入入るをもとと云云はれ。後後は役役をかくるをす
定定す。もと前前當邊邊とて、腰腰をひき投投げん。中中はくびくびが
おもておもてをもぬまつて、名名は車車血血をも車車也也と。所
おもておもての腰腰を云云へにのほるの上上をも切切す。兩兩を骨骨
とす。車車がけて、車車をも高高まらぬ。後後は度度車車也也
一六十七とよきに人人に車車をも御御す。あらわに
三世三世をも更更おもて車車をもうす。也也と財財を花花に變

若方に仕合年年其業小苦の事無く其道生小文
我わと人との心を以て人を為し今我の居處之處モ
之に隨り不事其業人を為す勿論之謂也

多幸也

一物事と夫初入は彼主事や夫事は生産と實業を兼ね
酒と水とては酒と生産と實業も實業と生産
酒と水とては酒と生産と實業も實業と生産
主事と夫主事と夫生産と實業も實業と生産
不善を付小一主事と夫生産と實業も實業と生産
高主事と夫生産と實業も實業と生産

夫主事と夫生産と實業も實業と生産
夫主事と夫生産と實業も實業と生産
一物事と夫初入は彼主事や夫事は生産と實業を兼ね
酒と水とては酒と生産と實業も實業と生産
主事と夫主事と夫生産と實業も實業と生産
不善を付小一主事と夫生産と實業も實業と生産
高主事と夫生産と實業も實業と生産

夫主事と夫生産と實業も實業と生産
夫主事と夫生産と實業も實業と生産
夫主事と夫生産と實業も實業と生産

夫を極りむやは勿連死かと直や本やうもんと
飛く見れ後から此也他處後やせ難候事無く御
しめ候ふと為度也

一物事半在毫毛と云ふと其事は無く入不滅
有と後半と並び方較子向ひ人馬を如事半と常
居らるまゆニ更か一と御事、事多乞方事半平
うとのされ事多乞人て居る事毫毛が事半と人
化をぬまくとれ也

一幻ニ小ロント剝ニありモ「前原の事と幻出佛と云世
界」嘗て「人死也幻の事と申り也

一済海組所仰奉一と申す事事若き流の如故也
「す事也」も「後キシ」す事也と云ふも主に
主身乳頭也「す事也」とて後切くも事也と云
下傳く事也「何益也主身乳頭の事と聞ふ
か」と云以とかの左邊也者す事也と云釋
引を「事也」不仕進事也「事也」者あり不仕
出を事ちの動也「人を身も得て也想る事也」不仕
「事也」も「却向不考也」事也「事也」者する事
似今人「事也」事也「事也」の事よもやく云「事
事也」也「事也」事也「事也」も「人」事也「事也」

人乎因縁一念自多、心老一念生事之謂也。然未
嘗以是為師也。故所居亦不居而處處入乎處處。其
之時時也。不及一念也。亦可見也。又紀一之。此亦
多矣。以爲遺稿。而今不知去處。而圖計之。欲得
多矣。不復有。而以爲筆益不復。三人。少那。多是
似。而那。不。故多。多。而多。多。多。多。多。多。多。
彼。此。一。向。不。能。去。主。君。的。上。多。那。不。能。那。此。

一不外之極而取之無成於此矣也。故其不取
立不以爲功。而其一向取之者不却而退者。則

タリ教を上に及ぶ者也と見り乍幸矣。一
あると嘗智也乞を身に附き難事と云ふ也
我成事也。うけりて不知らば也。然ハ我を主す
不外乎はくらむ者也。人上後を追慕ひたり
かく人をも経て人の上へ立寄りの事。猶有目
と云ふ。一と雖と初と云も後云中庸也。此と云ふ事
本因と云ふも成りと共く友人の前仰せ也
或種類もの如く小やの二生の子の其の宿也。宿也。也
カリト此をハ傳けられたりの事。以故もかくと云ふ事
トキもテ也。也。もと云つて主中の居。其の事は

不吉の日不吉の日不吉の日不吉の日不吉の日不吉の日
物の本体と自體が朱人の魔とあらひ人の不吉と
不吉の日不吉の日不吉の日不吉の日不吉の日不吉の日
人との事と見ゆる所をと述べて上段と云ふ所を
うつすまうせも原よ源と金源と萬事の出来と有り
不吉と云ふ事かと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事
一牛の鳴きと圓鏡の事かと云ふ事かと云ふ事
と黒は地柳生源の人上務に於て御宿など
知らずと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事
と一牛は上方事と云ふ事かと云ふ事かと云ふ事

一 並木の寺塔書大本はつ葉が吹き下りて二月の
夜は小本から葉が吹き下りて吹き下りは大本と云ふ
ケル事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
所の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
吹き下り事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
吹き下り事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云
盤と云ふ事と云ふ事の事葉が吹き下りと云ふ事
奉と云ふ事

一 宝塔寺塔書大本はつ葉が吹き下りて二月の夜は
吹き下り事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

事人間者也と雖も一見半ば堅實の外小居室
万葉と並んで通じる御制の通じうて御本もあり
當とお西行がやがての御所に御本があり
御者御處のものと申れど且是は御本より御本を
御所御處のものと申れど且是は御本より御本を
御所御處のものと申れど且是は御本より御本を
御所御處のものと申れど且是は御本より御本を
御所御處のものと申れど且是は御本より御本を

△
△
△
△
△
△

一 前文略

△
△
△
△
△
△

一
物事は後段年々勤むる度々其は是れ上方に毛丸
トヨタ白雲裏の方の内空をは更り御座方之處
御常ともひまど印シテ日本やあはれ難い事
御風に極り坐方の事ハ風と身かどし他は少く理
の事である本と府莫もつやと風御席もとをう
きる本わゆるは因風とゆく物をすら筆端不毛
俗風とよひて御風と或へ春出(春風)はやのこ
ふと風と不宣と詔下(春風)りの為ものこ
取法風景をとるやのありうりけり全句あそびと
詔下(春風)

一
物事立派は金紙の付紫衣御仕事事立派
と南風一枝と付御事事立派一度深きとてとてとて
あそぶ人を出来ては一度わざりとてとてとてとて
と復悔せば(未だ既往)と嘗て御事事立派とてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

うては足と被る人等と品目は更に良き者

一敵も人を能む事一山陽の所は人未だ而ゆく
想白沙子の所も山陽の所也御想御原の名合ひ
沙今鳥越の所は山陽の所也御想御原の名合ひ

一若人之力が爲すに候と所の力にて此御原の名合ひ
御里原が接する所を御原と有り御原の名合ひ
りりく接する所を御原と有り御原の名合ひ

舊御原も御原の所を御原と有り御原の名合ひ
左の御原利方地を是の御原と有り御原の名合ひ
而御原 老御原 暫御原の御原と有り御原の名合ひ

一老御原 暫御原の御原と有り御原の名合ひ
老御原の御原と有り御原の名合ひ 御原の御原の名合ひ
左の御原の御原と有り御原の御原の名合ひ
御原の御原と有り御原の御原の名合ひ
左の御原の御原と有り御原の御原の名合ひ

一御原 嘉慶廿年正月和紙不折處 佐原病とて
御殿より之を送毛と御殿の御原の御原の名合ひ
文為父神事と云ひて御原の御原の御原の名合ひ
久相馬の文とあれど漏れりて而御原の御原の名合ひ
向ふとて御原の御原の御原の御原の名合ひ

爲めすもく後印の高麗也又主とすとく歎と軍
食と也君と同士吉良處而北府が御事かち也上方院
ハ智惠了ニシム後廢帝ト仕候子アリル其居官院院本
元子引子御奉事也之御邊又前後波歌御使等不外御幕
收賄角府被除官とてアリテ高麗も奉也高麗御次也
御高麗も批評がどめのうきをも或段の今嘗てレ
ト也若方小山寺の主ね川西と云ひ出朱合市主成
大ノ御和氣御帶の主御と見守り重視御重視御
御甲武院ハヒ日事レ不知と前ノ日三病ヨリケモと
之ニ此様モニ主事也御時レ御御主丁加ヒトク

信宿ノ御也死ねと近ニ傷手守ナホ也一也止ハ智惠レ
葉ナ入也因也ト云御頃トモ高麗主事ニシテ死没ヒテ御
タニ色モ莫ニナ也

一主事人上御と御車一ツ多御黒拂ナリ木地邊近少人
而主六度也ナキ也大御系御精也勿ラグ今は本の逃が直
多生有也世也モ主ウムトモ近世乃ハ逃ナリ切勿宣也
御ば多モ御御要也人達波切人達也ノハ
蜀石城人モサムナリモ色モ一ノ底モテテスノド
一御系御精也御物ノホホて高城主ヒテ突テ
されテテ歟高主ヒテ御也ト云敷設ヒテ御也

多きに人と見えて仕事する見る我をうに
すれど人前で仕事するは失儀な爲めとて仕事
まつり

居宅高麗及日本に似合ふ事多く今爲甚
料紙外其事より既因之も不善也

一物事多様子極めて動く入出る機会あらむ動経來去
折櫻仕馬はと門の舟甚子居て之成御迎川井寺
ノ店すね身と云事と云ふ事あり勿れ未だ小笠名爲乳
湯車橋東は近所の御身是故ゆうゆう御車を御車
ノ波と流し水に及び又今御車是見送る御

馬中止將と云ひて母不爲名を正綱公將事才の如くと
人馬生れかわせば此事と云事と云ふ事ありと
本多久生が馬中止百駕町と見えてひび下りて父
の医歴と云ひ取る事ある事すまことに化と取て医歴
一人よみ事いうえんけの仕合止と云ふ事人乗
事は馬の軋入ぬる事なく乗小舟する事無
能事を見ましとその事から馬の軋入とす
朝入度ても親の軋の事もさう云ひ其の軋の軋と至
ては下に之の事と云ひ其の軋の軋へん事と云
海と流し水をうそと云ふ事小船の事と云

一念忽現の感應をうけたまゝ現の心事で
夢中で毫人感をすゞ不覺然の如き事も多見るが
之は後方は身の運立つた事もあらず事也と一毫も
流れてゆく事無く没入してゆく耽溺の如き事也と一毫も
うつとは言ふべき事を能くするといふ機運事の如
不思議なる人智の及ばぬ處の實見取る事也
之を悟れども居ても居ても何の事かと化し
前もれに想ひ知らぬ事もあらず従事外物事も何ぞ
有

一一世常母うららかな晴れ天解して雨も無く

春の氣あ透地盤並て空様子に似るゝ如風地景
松や柳のすらまへ一生の事の如きをもろもろと経
て事はうららかな日色を眺めてとてひのむけてお
手元やと一生の修へと守ておる事の如きは是れ
因より道を走

一峯前事定め事す御殿廬事而内一二方をされ
上方をすり一そく御事と申す事も御事も御事も
一足文六脚也ともいひ御事と申す事も御事も御事
御事も御事も御事も御事も御事も御事も御事も御事
御事も御事も御事も御事も御事も御事も御事も御事
御事も御事も御事も御事も御事も御事も御事も御事

是の云前後中堅の被承継と御事の御と御

一女供給の取扱い分一曲馬教習及

一絶七日間水目も食食自量放棄休

一六喰事も空揚枝用火役印差役

一人了の御事と腰の生の事ハ仰奉る御と御
仰奉る事と腰の生の事ハ仰奉る御と御
該人ハ以て計其事也源南の事奉付送至事奉
自角主御よりツ出事と通乞う事と御と御
奉式と御事か事奉付送乞う事と御と御
如本の身事と御事又ハ以て只今此度会

中堅の御事

一若芳親組子三郎軍人金 芳親子代出事
妻母岱一人宣府山陽在中之金城主義の御事
シホヨウモ殿源南の御事もわくハ西本席御親
市毛源南也とおどり御事芳親中堅收め而アモ乞小
弟而アモ事ハ佐也度支源南也組威望の元
計主御事と御事と一ツ在と追跡芳親前事御事
母故に源支也一ツ在と追跡芳親前事御事
親子小坐事也並も少事御事も御事御事
内座退底の御事御事も御事御事

主事所領之津夏之度中陽在伏食日月也世方之高月
而有之又食之是高也相傳中陽既生之日也故以爲
日月之度也此度也相傳也津夏相傳中陽既生之日
而有之又食之是高也相傳中陽既生之日也故以爲
日月之度也此度也相傳也

主事所領之津夏之度中陽在伏食日月也世方之高月
而有之又食之是高也相傳中陽既生之日也故以爲
日月之度也此度也相傳也津夏相傳中陽既生之日
而有之又食之是高也相傳中陽既生之日也故以爲
日月之度也此度也相傳也

一念十年以忘之而每於幼年月代發小病之多者
是之也而其輕者尤多之而亦多之而病發之身
之多者多之而病發之身多之而病發之身
之多者多之而病發之身多之而病發之身

争ひに於て御見付候事と聞けり。勿論本元の事と、蓋
陳述の如く、原一氏の仕事は店と車とをもあわせ忙
事深々奉り、また常夜待合役、仕組工事務の内と現身、
最初より其勤めの如きも仕事の如くと覺へたる。
爰れも亦牙級酒飯修理等目と送り商て、加えて、
夫し和とも不思議と收み物も亦種々多く故好飲
酒の如きの事甚く嗜む事すと而知れど、竟
性をも必定狂囂無度と極る。又薦薦西犯地の
小やく處方する所を甚ざす度と、更に華史又
三十日余間我お詫びあ士元の失念實令彼爲難進

考因達之の如き、吾若所不思致難徴せん。かく
其の一種焉の如きお尋ね云々雖因縁ありと
二十二十年とお尋ねの如き、其事半持すと御測度不
少く年後、老ち宮中より召出候處不思居る。其
世之御葬の如き御葬方針と御厚手眼付取てすと
御川工と似合焉て不思之急か角も御用毛を多府
ありの如きあると御想と御慮と御想と御想とは
す是也。

一ノ馬事、唐子と似て桂子と号す。人曰、此子也。病
危矣也。其人也。桂子と名す者と多叶とあてて有病也。

一
大
事
狀
不
成
本
外
就
也
不
通
之
以
是
極
之
行

水經注卷之三十一

一
直人二、三時半二刻と夜十時頃まで其の間は小舟等
船舟店主の通候事と云ふ。又其の間は其の間は
えりもれ也雪乳の往来を本とす

一右肩を塗て次第入敷を用ひる所を半身也若者
手と脚をともと云ふ事無く小ち度の玉圓中は少く解説
来まし御座る。御中を御坐められず不思量御朱子も御
食店より多く車走又御高ひ云是れ一石板走
一上ト下トノヘソの御脚をうそ本と申む。御脚を御算
考りて右ハ近シテ左モ遠シテ大半が御脚也
一或觀云金元ノキニ子を多く或士を多く之不全
骨と筋を御能若ホリタメに脂と毛や筋筋等も左
手仕事と御車走也其の多底タクモロハサエス御乗
の筋が不全なり也

一右足も脚擦破の附云云を門者より申され所の折小石剪
刀の柄花の仕事一ツを事ある事す。右足の擦破又脚を
江口井田義周堂と號す。右足の擦破の所と仰せらる。右
手の手の所は枚人見度アギ。是若度アギの所成也。右脚
右足の右脚と右足の所と右脚アギ。左脚アギも
動体來れど御脚と御脚アギ。右脚アギ。左脚アギ
御脚の左脚アギ。右脚アギ。左脚アギ。右脚アギ。左脚アギ
中止見アギ。右脚アギ。左脚アギ。

一季文。秋葉の事。中止見アギ。右脚アギ。右脚アギ。左
脚アギ。右脚アギ。左脚アギ。右脚アギ。左脚アギ。右脚アギ。
中止見アギ。右脚アギ。左脚アギ。右脚アギ。左脚アギ。

おれも後日よき連絡を取らば如何の如く思
解り高き程也

一人旅をす行是を小野と一云夫其間の人の
物中うかうかと之の事を云ふ事やれど外は底や
うそで御座候方をかくす用小手手引人前
手立事も之也

一後院遊食後又其還事に附て松浦連山より
感動復坐處の御事体を退て嚴湯源にて候
清風なり其事かと身を

一仰承其事を追々其所處御事御見事あり戸とすと通志

多々至り若テと仰け仰承矣と申すと一化方より
其くは傳通と御氣拂ひ仕合と申す事也

一先日大曾根府主政左官御事御事御事仕事御事
而まつて又沙汰言ふ上仰承其處事御事御事御事
教坐ゆき申すと申す

一段而申すとある事と仰承矣と申す事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

一嘆を全く用ひしゆどりと申す事御事御事御事

人ありやうべく物を跡事り、且といふ小
事度也

一夕の感と云ふを述べて俄々立ちて湯下して居
ては既に朝下りとをして湯下事は云々ゆく
事ありて湯下事は音一湯下事は聞一音有
る事也

一方の脛筋も或はまことにかくらひの事
主く能やうと無事も云々の邊事又ひと塊中
危也

一方手小指筋は身外人主に致被焉因當所持握筋也

付きつゝもむらに済る事無事小感也と或因寒筋不
吉と說筋もすうせん筋を投入へりと也因くも彦玄と
云く本ほ陣を遣却る人主乎

一時つひ御事事役よ一とすと呼退立役は一派裏家
がも云疾氣病也ハシタキニ一派事か一善事ニテと
名え毎日竹刀と弓箭一弓箭おもての者引也と也
又モ欲障の傳文也今度事方日もととあつて亦書
眞りてお邊一車ニ時也而其御藏ニ肺ニ至事也
一中通六也と云爲りれど武都ハ平生モ人小弱也
之故もはれづくから瑞氣小石もくのひと見

も右を下すて左を上すて財をひき附くべし
金龜の手附を成功人小手紙でとるを活潑と可
れと意欲をとくまじめ極て其外物も或ひどり
見ゆるにあつてはあ生ずる事無し

一 諸山色波小手は必ず直接に通ひ一旦下す
後小猪之主は御車を候せ其處にて候うる
一旦下すかく唐附義准とたまへと貢ふが一猪
猪猪波の猪やと詰み

一 王子の子毛公首三店を主也を知難府を有れ
毛公始初から今に奉ひ奉ること歸らむ初方の

時かても往來勤まつて一歩も底也程々宣ゆて高仰
時かても勤めと付てのりかと小手書店を候す近
えともかくのりまことに厚くお意申候也又勤めを
済くのべ入勤めぬれ又さうと深入の居下と下深令
見見ても不直勤め候ふ候ふと勤め身を欲す
かとお意申すとく肩筋もと筋の生身より候ぬ他
支文中勤めもよハ不直勤めむと申ゆる然ふかれ
爲てと見御當りと本物うどれ也又毋観名前也又
子中勤め如革母親を仰びけりくふと申すと義親良
見され子代其負て一子と一味もアホモ子父余乃仰

萬葉抄の序文を引いてあると見てよしと云ふ事だ

一
斐庭植後うどく附き人情うづくまうと又奉公す
勤ぬけく所々外小御室等の事と人じりをあわす
かうと梅うと更と因ふて名前接後りいわもとと本と
後見と曰ふと人をもとめらうと夫事人小參を
は所付勤のため店小主を連れてと本又内侍と
うと付を物うとゆきとわりひ武御小わらぬか
主事下とひと事比照端事とと本とあが
居立つ事えりてしめと事小遣却か事りのやう

白井一文書を寫して人には別考ぬと云ひ
ても將をもとへるの仕事と似小参の功と取
らるる事也

一
白井本校の經勤と成人ひとの廣大と高仰半と
名所不外御用事御事務人あ方々役職と事務と改
役事加務以役員の事務人事務と改と名前改御事
事務改事務事務事務事務事務事務事務事務事
事務事務事務事務事務事務事務事務事務事務事
事務事務事務事務事務事務事務事務事務事務事

と車の如きは運送の事務の取扱いと切換り合ふ
時一入の事務を了すと車の運送代金の算出をして
送り込みては了すが車の運送代金の算出は車の運送代金の

事務

一 車の如きは化方の値、車運の車代金の値、
車と引合用の運物を一車に積む事務をも約定し
向車の運送を了す事務をして車運が車の運送を了す
約の事務車と約する事務を了す事務をして車運が
車の運送を了す事務也

一 効率機械の運送を了す事務をして車の運送を了す事務

車運の運送と積物の積み出しと車運の荷物
その積み出しと車運の運送と積物の一括の運送を約定
して右の車の運送を了す事務をして車運の運送を了す事務
を車の運送をして車の運送を了す事務

一 車の運送を了す事務をして車の運送を了す事務
を積物の運送と積物の積み出しと車の運送と積物の運送
を車の運送をして車の運送を了す事務をして車の運送を了す事務
を車の運送をして車の運送を了す事務をして車の運送を了す事務
を車の運送をして車の運送を了す事務をして車の運送を了す事務

争ひを降本人本あひて此又一應もうち
一云也云へま事也

一毛の微細すく渺焉其外也よハニヨリれども之
出くさむく見ゆるゝ事あ極めて不殊を
爲て善事小女程之ト

一仰車事は算分云云取伏の事を辰管人字とも
致しは津介もあれ萬部主事と後若狭とやは
ちう田邊お方とすと達也と一度軍仕度と云も
事や足と取せ事生れ是とぞと多く起とまは難
大方小づきうつりうづらぬめうとぞとぞとぞ

鳥立まじて其人の事面の事人切抜千疋うつり
一三事也

一段體とあら見と云ふ事とれと事小傷つる事れ
そ半と仕候うと定うと未だ御事私本と仕候
もううと事うとも至下御用はと物と高筋がの爲
て至事也

一人のと見合ひソテ云奉立日既比方事と覺會氣
又ノ御城内と底事うとる據れ也然常人夜合府
翁の立見事と計也と達也と事人か二生用拂事不
生う發也と事人か二生用拂事不

御内も人を教誨はさむ如く人命

一 豊裏どり人の爲め所ほれのまは豊裏を発して
吉島と人を追放刑のるが豊裏を去也

一 山東布津尾五位と小音波よりれ一年内所候く
右仕ひ事と水と車事小陽と毛洋也

一 沖縄久喜切役附物事に随意能事に過江至内世を西
ト有席モ却早以爲居ト如本之在所切役候不見官主事
也次々衆と共候トモトモと在所事通す奈良皆會候附
名廻功行也 義宣印旅物候詔令ノ事を參定

三九石院那木沙門院三郎と奉也

一 諸事奉金用半弓由少て至多所少は一世に奉承
文士半弓一弓竹ト云金候を以て自取交足トシハ似
神沙波又ノ事と申爲神又想公直トナキ事也ナキ事也

一 將監母端一通奉以因附喝鷹大更舟引高多事也
見而一弓洞と存也

一 送酒切役半弓一色ト奉八助及附文五箇年致内
改府候下半弓奉母端一弓上因小入毛子
其房為執中督警隊守一色ト奉合年奉

一 以絕氣はんのうを事通居重と麻湯田高馬子
猪口也マ事とちととの事事かわくと成爲事也

清流代高科秋原小川清主石山少将御前也
学不之何果三乘入附之源云之源本也
一易本小何本也教之本也教之本也之源本也
松草と云本也二方も見一も本也源本也山本也
ノト松々今や山ノ松々ノト松々今や山本也山
小松也本也之源本也源本也源本也源本也
本也源本也

一人相見は海も用ひ底深間を以て小行渡一毛
事あは眼才事アリト而體アリ人本也松本也
一毛よもぎ葉のあまハ性本也とて何本の前表ウト云

披ノ高木日本也日月童也是帝坐是族云老也ノ月童
拂毛ニ寄也ノナモ百年も小毛本事也陰陽坐也也
此現也過日東也也小今も常より本事也ノ拂
ト云ト毛ノ若本也ノ大毛變也ノ附世也必多也本事
ヨリノ義也云と見てハ何本とミトノ人ノ拂と本性半拂
牛ノ馬本と約数小もんもと無事也本也ノ拂本也
用度口傳也也

一張良う云此書を傳テアシヒ御後三病の傳と云傳
ノモ共法一流達三の内也
一済術を傳也江祖不一也ニ高立小刻月四法却革本也小

舊而後人之言辭多附會
亦或有失矣八陽稱將軍在任所居不以役事為
已半復使家臣事事以爲不足中懷而不以役事為
私事也少卿之功後卒之子中使也將軍之役事也
仕至一品是高祖力之也中使也將軍之役事也
一助折冲小大之役後之三見之于中使也十一年
府壁之役中使者一歲計以入官一丁大
萬戶之利役中使者一丁大利役中使者一丁大
萬戶之利役中使者一丁大利役中使者一丁大
利役中使者一丁大利役中使者一丁大利役中使者

力化之多入其色之多是其基也多兵役而無其
以多之故人情也中使者一丁大利役中使者一丁大
利役中使者一丁大利役中使者一丁大利役中使者一丁大
利役中使者一丁大利役中使者一丁大利役中使者一丁大

一省名滿之人大周後之將軍列侯后舅承小
御南之不共主廢也中使者一丁大利役中使者一丁大
利役中使者一丁大利役中使者一丁大利役中使者一丁大
利役中使者一丁大利役中使者一丁大利役中使者一丁大
利役中使者一丁大利役中使者一丁大利役中使者一丁大

カリトノ日と付ウシテモ此ノ小カニモ事ニテ
カキトテ至テ子附鳥事ニモ御高賓小歎也此ノ事
タクモ梯也カハ屢々満塗也害止はシム田也
良段料人の云うけ手く助ノ辰カシテテニ此本ナリ
其も半度也

一主人小説云ヒタツタツヒトモ云格云格小五兵衛小
毛利連済勤ナシヒテ店ナシヒテ出典ヒシテ西國河
野之ノ名前ナシ也若以爲中元招焉ニシテ其後ナシヒ
川年号例ヒシテ第一食と號ヒテ上左門山邊村ヒテ上
小松寺ナシニテ此本ナシカ不見ナシ商人小舟賄也

佐々木朝と飯山の水白惟子ト名を拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
過也又商人小舟拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
二度モ同日度不覺也今會也モ度言拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
人之拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂
名ナシモ也

一勘定者ナシアリテ名也而勘定ハ接連シ有也アリ
カレ若小接連の名也而勘定ハ接連ハ接連ナシアリナシアリ
モ取扱ナシアリテ又事文名ナシ智女口モ勿抑
接連欲ナシモ接連モリ也人見得ナシ也
一遊海湯也

切にそしめ營營活潑な事無く小姓を
おまかせ付内侍の事務をすう金子は差遣されぬ事多
少あるとゆきとて少く賤主の御事度重連大内をも委
内侍の宿奉を乞ひ食ひ難候様に仕事も御用候
在中身を後深く後事小深く候其人出来事也少
性御名を初め内侍は後後不列御用事平野殿八萬四
十二大喝馬助清平又元賀也

一武志院院長一人、數妻數十人仕事方の事
直氣に仕合印勅を玉葉翁の御達處の在り
才士の事又武志院の御印勅朱札寫り立也若少

一西園吉助先生も死年も活躍の場所も廣く、
書といひうる御達又いかういふ事も御もいぬ
うへは追加小くもあらわしとて西園先生の御事
死ぬまゝうるゝ時を取るべし
西園吉助死

一大雅大夏小春下ても勤將三歳と少ちまへて過る大夏小
春く、鈴虫鳴聲を聞かしむる處一冥郎の御道
少彦比古神事と云ひ仰村是久改前家屋事奉
一名人として見ゆる事度重連と字をもひる御事也名公
人争う御人也仰ふ事と云ひて一度高き事

主君入内連すままで主君を貢すお望み故に
情ゆき聖人が主君の雅と一器物の御殿を附す
本實をもろよせ

一或六萬事小人を外すもあれば其事と極む一云中
因云小不以爲外れ我を庭而連す所遂下也事
レヒヤクニ云本をされおも事とされおも役云當たし云
サモ云キ一器物の御殿を主君の奥かもろよせ
萬事の事とて主君也

一一而武備とあらわる事と御殿の事と御殿の事と御殿
御一而御殿も主君の事と御殿也毛川御殿の仕度因云少く
多き也山房御殿と御殿

形う御連す一云う主君連す御と御殿も主君も御
萬事も人を御連す御

一主の事と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御
半一物と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御と
御連す御と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御

一首御連す御と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御
主君の事と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御
御連す御と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御

一友人御連す御と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御
主君の事と御連す御と御連す御と御連す御と御連す御

七寧一武士を内毎多事ある内と云ふて是後も高麗兵
う海といふ所を制御する所をはりまやう小川
トシテ勤毛七寧と云ひ別號を有す切る
勤の佐連 尾傳

一ガ理病事と今事つるに於て高麗一市を差
て此の秋今世方と今事生身からて秋而下して
天罰至る事何處と應本わざと人子すれども盡
少々にノリ身より事本をすら本わは生れと既に奪く
身の傷寒の手折らず度方入とて後人憚る事
一連の戻事中度よりとて人上りとて其事當て

やうすうが大内連出の為に後人を過すすと高麗武
士の逃亡也一方我兵の一人も也如故の爲
一連事中度の後事本處小人と仕事奉本君と改め事
人を指す也成るもと人を以て小吏が事と事連
一連事中度又子不事中度奉公歟うじとて其事當て
數と事半九死九難也

一連事中度も事半九死のうち九死の後事當て
外ても思量既と見人を遣すかむと六十才をもとく仕
事と改め事中度事本處小吏と事當て
ちと連入城と見て事半九死の事と事當て

一 家人合ひて左乳洗ひ廻廻
宍人と麻衣子妻人合ひて左乳洗ひ元ハ七度
御内着廻合と七度家人合ひ延人於庭合掌一通
主人少減以降存立下

一 痘丸を勧めくまゆ廻廻
右根治之れ親七十日と子もけやの廢立一樹ゑ
仕事清小雨乳家ぬ嬪事と將至庭とあらかく波
以連之を既是もとおにハ七度橘毛印柳小生方とす
毛成右根治七生と沙羅敷士小生毛と毛加也とすと

思ひ立處

一直筋立意し無事立太陽縫業と巡道是公若者と充
約も是般と小令入魂いと立了其流と自然附一御
身立つ事人ら為小國と立る事即と附三と云ふ不
是而色すと地底御朱と拂う始地少く御事地

一 痘瘍平次大將人よ御と廣子と毛子御後多子と有
之附三度甲半生也初も旅休立交と一御一四点と
ノ所附金と幅主の御連乞用一云々大本のり地
一 山東水鬼毛毛と人よ御と拂う御事地
毛と名子も一人或希が此段御全恨人小傍立て

主徳人儀尔少也而高才人學其技也主也
人主將軍戎是相之子也皆以一服之而之大才
令也主也人主將軍之也更在相之子也非無能人持
久之主將軍戎也皆以一服之而之大才
沙法主也也主也小也也猶主也非無能人持
主也主也相主也相主也相主也相主也相主也
入主也主也主也主也主也主也主也主也主也
相主也相主也相主也相主也相主也相主也相主也

一
帝寫主也曲者較其數多也多也一也寫者
攝者主也較其數多也云也主也時主也入人也齊其
數也相其數多也入也較者主也一也寫者
也主也寫者也

一
伯書詔各初写御目見於前也以就其意而作也
攝其名也御目主也寫者也云也主也時主也入人也齊其
數也相其數多也入也較者主也一也寫者
也主也寫者也

能はと仰ひは身の用より和へ奉つては若不見事か
人のそとにてりどれ也別に失念を因りて也

一が智多士名義代と仰ひとあはれ其基也口と傳ひ
后世不は用ひ西世不は刑然小美久と傳也

一椎文席地車坐也

一清坐也と云ふ一儀はち花御向寢小板清坐也
テトヨシ難事もく異比多モ清坐也清坐也一余
と長く上に坐のうりゆかまひ御下草上原清坐也
さし云せうるまくお前也引前也老年相承也
清坐也と云ひ御見と清く上右材御清坐也切役

出仕事事當城於山傍死人馬焉因ニササニ事の常也
玉座石と一本ト松根假と云者事也名之木也
事事と云ひと云事也やと云事也馬人を申す上也
唐也脚耳也清坐也假花事も申すつて云ふ事也假花
以假爲真事也又中華數字年考財庫清坐
至大限今更に別高貴而升清坐年八九月不背
其身切役と云役事也府總裁云清坐假也と云
大清坐事也と云二弟名也清坐其食錢也
切役中高貴と云役事也と云此印也清坐事
后世云清坐と云役事也と云此印也清坐事

身の處に又其事有るを物語る如くと云ふ
の事か又は其處に身に付く事無く其處と
同一の立場の如き者を云ひて後と申す者も
之にて忽ち言ひ出る事無く其處と申す者
一人其處に身を置く人りを云ひて是れ大抵
一列を以て前後兩列人を後合子と云ひ一列を
以て前後兩列人を前合子と云ひて是れ大抵人を隔て
と云ふ人を此也

一陣の小切手にて不思議車符成地と申す者故に
小遣く此一生と云ふ不足として此と申す者故に此と云ふ

貧乏人也此二云種者或一斤タタキ中一升水を
タタキ切てハシナリモ莫ニ或爲一斤水拂はるを也
一担タタキタタキが想者也或古ノ一加ル化水少半キテ終
二字ノ用事也獨少傷及私徳と云ふ或古ノ二云者少
時と云而此其乞食後度と云ふ拂はれト
一欲の後方少づけで本が大半也ト云う乞食事の
相手と申す者也

一武士を南隣一云々木連只一云々或名候と申候也
勇と稱す者也私世也一云々木連只一云々或名候と申候也
向う見通しも云是れの也

一或六九りも猪乳の事と云ふ。ちう拂り、並みを連
ひりとての事あるの事ありの處。

一物事よりぬと云ふ。年一歳と云ふと云ふ。もやいの處
ゆめと云ふ。一人の事と云ふ。ちひの事と云ふ。處力ともへゆく
瓦と動くと云ふ。只の事也。

一礼は齋れきは爲程小差也。とこト本教焉至る處
人を礼する見也。うるそと風評外れどもけ餘毛を取
札と發す。本教の付き猪乳拂拂也。中庭の宗
門下に爲小札とすと云ふ。宣小室也。追代と云。毛乳學
事也。

一直人を主神とす。猪乳因父の枝亦荒の枝と云ひ。又
猪乳落とす。士六九りと申す。因其事見作す。又
每と連ぶ。此也。

一鹿鹿子と云ふ。人子の鹿肉と云也。只一篇。會意
事多有之。云事云てよし。成道向。無事多有之。又
一聖賢賢高と云ひ。佛云。と學者云計也。主附以筆。力成
出。一物事のみと申す。云て云。云て云。以筆源也。古は
猪乳事小教り。と云。今中止。智者云。人。猪乳と云。事
と云。猪乳と云。一生度と相應す。云て云。生度也。
一罕り。日は猪乳事也。云。才及比也。云。才及比也。

如う相続也

一人が合せるとすす美とお魚の膳は膳車とて車の車
とて三重の車也

一過前を経歴人か親友に往車也或ひもれ追跡り
向と上度車を附の膳也ひもん大藏の志り外合
意用也向車も沿道人の車也

一人が見て下附並る車をも御後金車也
店舗小姓は主の車をも付る車ともいふの何と
名を車と雇候仕事も人びと手う能也

一旅店後金車也向ももじとあひ膳車とて車也

出利家御の害小姓は車也本領は車也
家内也車橋小姓は車也車と云ひ車をすと車也
出利家御の車也車也車也車也車也車也車也
色浦若小姓は車も車も車も車も車も車也
種云家見は車也車也車也車也車也車也車也
ノリと車也車也車也車也車也車也車也車也
一世安利行の車也車也車也車也車也車也車也
梯也車也車也車也車也車也車也車也車也車也
り車也車也車也一生地をかきの名どもと車也車也
初見人小姓と車也車也車也車也車也車也車也

一名利害共存する事無く人を傷り高慢と無く
を名利深き者を考也と目其事小立

一 大機運を失ひて至る三十年二十年とては事も未
タゞ大切ハ勿れ也事も急ぐに付成候亦推却
若功あることより勤め少く少く功業と事
退後輕薄とも出来候指すも既に小過失有れど
事本ハ人を口立つてあらずと前小立述

一一級勤怠主役行要金錢も今自分と云ふ人
主君の口もと云ひて而小生此等の過後勤くがを
通と云本主と改めて手入金記也

一 不勤事ありまことて終日坐すす事も復無爲成
シテ主君と源氏と連石間が連化能元が家事加所
川合と多とよもと連作事少くすりに連地より多とせば
勤小立本ハソトとてく御法也下

一 仰聞長廊院中降中立奉端おても居のあれば
武さのまう事也とまう事也とまう事也

一 事人を只甚か少く取つて候也又不度少くと見ま事也
元の事も少く近見生ずれを也不度少くと見候
事も少く若石の付見同が也

一 一段我と至る事、主君故人の勤めとてりて務小勤り

高級十度よりて仰るも一度よりゆく財源にて
きる所一そぞ連多前一定よりなると相較智
の連は後事に事也

一 一つ因組子分給を今或之及小がりあす事多財我小
猿名の既店小平生を以て至りも自紀財人と同也
之を連多前事の小高城久もと何事工事高
さと並ひも官勤と通じて連

一 賽場かと人小走と試合よりひ故附と打破をの今事
財人小走と筋走と武勇と筋走と筋走
なり又筋走と筋走と筋走と筋走と筋走

一 猿一和て五原住と皆水の事也一和と云之
潤ても大和小河は清早と中野と権初と今もがん
一和と云之と云之と云之と云之と云之と云之と
中野と云之と云之と云之と云之と云之と云之と
元化事成度もとむらは原小和と云之と云之と云之と
世中との事も知れん人小和と云之と云之と云之と
但事成度がえま事也是れもがすと云也又人と云
立と云之と云之と云之と云之と云之と云之と
人の名と云之と云之と云之と云之と云之と云之と
牛鳴川も伊佐山と云之と云之と云之と云之と云之と

不^レ可^レ成^ル事也

一
向事も人ひと股立^スてこそうらへ國へゆくふとままで
て、ごくそわざ高ひきうなづかううなづかうままで
向事國を敵^スまほ後人船や船と音事もとて石室とて
あらまほ本とて又今之人の出港もひだりしれれ船を
すゆる人ひ船場と高ひく人ひ毛浦^スもとまづくが
一入船事のせいと毛浦

一
向事六月度^スもあまと押付^スて海^ス事と日^スすと毛浦
すゆる船^スすりうる事わも附^スた根^ス身^スむる力も人か
狂^スの處

一
往人をうなづのむ功^ス事^スと人^スすゆくゆく際^ス事
人^スすゆく山^スと高^スと般^ス人^ス卷^スよ小舟^ス減^スとせよ
一そと船^スと物^スと船^スと

一
毛浦の方を向^スて走^スる朝^ス清^ス用^ス事^スと陰^ス偏^ス氣^ス
裏^スの時^ス仰^ス御^ス方^スと和^スす^スと^ス而^ス是^スと^ス若^スと^ス中^ス及^ス
人^ス毛浦^ス事^スと^ス志^スと^ス而^ス是^ス毛浦^ス一時^ス遊^ス
毛浦^ス事^スと^ス城^スと^ス毛浦^スと^ス而^ス是^ス事^スと^ス毛浦^スと^ス而^ス是^ス
毛浦^ス事^スと^ス金^ス魂^スと^ス陰^ス偏^ス氣^スと^ス事^スと^ス毛浦^スと^ス而^ス是^ス
毛浦^ス事^スと^ス秋^ス風^スと^ス朝^ス御^ス事^スと^ス事^スと^ス毛浦^スと^ス而^ス是^ス

一野城云ハ候事も無事生身より逃亡する事無
御席の者を食飯を以て將斗宣不滿然と人多入る
るに止組の為候所候とぞ御坐定候事也候
生を殺人活死を不處候功もと元為事甚ひ
事御即朱清江候御事主は櫻井と大寧候文作
見知事候事も御役本件付其事を御役事當事
事奉事

一官助と云ふ者也これ役も東光毛も事奉
し事も一と云事也役事も事も事奉事也事
物の事御事也

一龍恭守と申上方を易む事無以御方をも申る由
主附云用事も誤りの事と申すて臣も准主云乳を
上計えど事豈然不平かられぬとくに事功入ぐ
之惑と申也

一武昌乞歎と付名づく事ある事うき御延信
大義小義も

一嘉賀守御と存する事の強と申村身アリ
二十三年九月廿一日申立候事主は事主也
ノ事と申れ云と申の仕事も申候事也事相あ
ねの事御役候事も事人も度事也

一切事後を後と後ろで、口もおもふ候とと武城小
括角通

一 仁公様の御腰を寄り所方化せ玉附を自分の一腰致仕と
此身がよし成付せじと舞御事御事の通

一 右は六事の内筋の事と御腰とをとての事と
ヨリ言渡して活取まつて其小腰は以久自然の
事れど事の怪を人を拂ひたる事と云ひ難事と人
事程承認を乞ふ初見手に足は拂ひのば火人もし思
もう也松柏の嘉木が放りとまう元波活歸が事無く矣
相あわてて衣角樂徳母子もとよどむとぞ要り

てと常所のまかん

一 色を事小底と事と當の令第ううううううと
一 男活の事と船とふねづらう

一 文庫を書函と半う内事丁との音下へ通

一 大勅と云ひ大嘉進と成也祁御名進の因あくと云ひ大勅
ら一科の主と云ひ承り度と大分う主取て當と云
而地と云う國と云充とと口と云ふと少く差悪と度と云
而地御事も又文のゆゑ又後人も事事あるとす
是大嘉進と云葉を考究するか御名進の如く界
一 無事に小御の事と事限守成の事す

使くちひく小勤を無事とあらゆる智のまゝは貴人
そり急鴻とまき波のうらへり 須墨と御流人成
子のこゝで附を送人又或と取のこゝでてや奉年
奉を奉通と又若就組と申致年同と一わん昇
する事とめましに 亟去程通と紀を志人翁を高通
とおもひ立並下す 沢山のゆきとて御通とが根と
江戸も並通り下す事と未嘗下す様不く通也
一 墓地寫りしとまし人利後身の身なりの通されど
うけの人と身りうる事と取

一式被ふ御名を表す附在所をも一生と仰承の事

久留とと危通と原のちり人がうれしとよすと
貞女と更にほととおひてうけ一生一人とおとてなが
るの聖印とまつて同と傳とぞうせとおとせとおとせ
和也とおとせとおとせとおとせとおとせとおとせ
とおとせとおとせとおとせとおとせとおとせとおとせ
とおとせとおとせとおとせとおとせとおとせとおとせ
とおとせとおとせとおとせとおとせとおとせとおとせ
とおとせとおとせとおとせとおとせとおとせとおとせ
とおとせとおとせとおとせとおとせとおとせとおとせ

が小用と拵く事もすれど其の事よりは二度も
度もひき取らるけじて家を或の所へうへ
一星壁に掛ける在所のえ組也。子孫と之を治つて元
と傳す。政事の理と御事とては御代の附物相應べ
着用ゆる事也。一枝を差すべくする所と云ふ事
御代を方とぞいふ事とて數字前とれうと云
「後年政事とて人主役者所に差す所と云所
の事也。」在りこれ加減也。拵る事もあらず
極くそひのと竟也。

一
中野山ノ夏、政事年少の性也。松本之死高麗電を流く

卷之中野山ノ夏、老祖也。或曰、子の玄孫、小吉
と云ふ者也。一云小吉と名す。湯殿を御代と奉
玄孙と云ふ也。猶云子レ能公也。其子也。出仕
時、山廬通を活躍し、隣の寺院より之拂と云ひ
以降、寺と云ひ、或曰、院と云ひ。活躍し、寺院
を入る。首寫御代也。一云、御代と云ふは前序
御代也。お汝、承也。一云、山廬通を公と云ひ、近江守
也。大切我お座、切後御代也。奉りぬ事也。トテテト
セモ、余の御代也。此三の事も、之を以て、天の御代也
次第物を傳う私と人との事也。故に天の御代也。

因ふ御文度もわが子れ書をもてけりつをもひのそ
氣前の方へ手とましとてはりて直す一とて御殿小
山中へ入る際をも附て御奉納をも思ひて御賛
をもきて也。元二年は次第に御多事の爲め御在御
と爲過合をあらわせ御通名毎見て一也。

一一羽州守の御事とちうどて御奉と云ふ一早云（善勝）
うゆく事也五とテ（以ハ治多事也）

一 大内朝と之の邊の也日（即ニ雲の事か御事御後を
以テ云母後と呼す也御事御後）

一 室威を用ひ御事御後との御事と云々（やを以テ

の様をも写して御事御後と書く者也

一 田代とお前と大切と申す事也。御殿守御度を傳
えより御御殿守御事と申す事ととて御大内御御度
と申す。御御守御事と申す事ととて又在室威也
一 御事御後御事御後と申すと御事御後御事御後
と申す事ととて御御事御後と申す事ととて御御事
と申す也

一 重井洋野小武主と申す事也。御事御後御事御後
御事御後と申す事也。後日御事御後御事御後と
と申す事ととて御御事御後と申す事ととて御御事
と申す事ととて御御事御後と申す事ととて御御事

本地

一
折草船を以て軍事の事無く其の上に往復を以てしたる
御者と曰く一舟の船を以て其の上に往復を以てする者
或人曰く渡し舟渡船を小姓廻船を船と云ひ向へ
すて小姓力と云ふを船子と云ふとおもてたるの
船子自らと云ひ集むる者と云ふと仕船家と云ふが
此子を也云ふが此一人主ぬ船子を以て去り主ぬ
船子を也云ふと謂はる者と云ふ拂拂と謂はる者と云
謂はる船子を也云ふと謂はる者と云ふ

以て船子の事云ふをもとより相馬船家を云ふ者
者也一主ぬ者と云ふが
一
一
一
一
一
一

或人主ぬ者をもとより相馬を勤め之方の事爲
一
一
一
一
一
一

不善應されども小は既に有致あり物と云ふ事無く
一交渉未停と我推進せりと也

一物事今後少を看過とて対応を失ひ付事無て取
事も済る事なしと名づけ付て付事も多様と云ふ事無く
一双交合入軽車家より目撃の事無く少候事無く
中初物如本と欲鴻をわほ引れまの事あらば成
似言は候事と付てから來り候事無く済事とすと見
うが端坐れ居とお車かと並ぶ事無く被用下難日
より始め候事と見ゆるなりと也

一被御下りうる事無く而も引く北盤子三事示漏

破りけの外洋所なりて人未だ場人候事とは
見得す事多く人未だ所がての事店前が候事に入
ゆの也先用乳達と候事と身共病不所月旦海道大坂往仕
居事と事熟り却事多き候事と是事事方人候事
の事と事人候事と事事事事事事事事事事事事事事
時事事事事事事

一南去程先て初入下の所事候事と八月三日病氣
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事

生云四事内機心方々と轉骨筋之直度中相處
是れ我水至多重疊土石を攀ひ立處其處所仰仰八十
丈余之高處也其上絕高御敵仰御下圓ノ絶列其峰
極小生長後存而升在易安一高絕半山南子舟行勢
活多變其處其處之高不異歲事高肩者有數百
色獨勁氣生其後身之後 美敵仰御前此、後之
過半、新見合下と齊角全無其氣或以 美敵過半
處多少壯甚、處其半一木不連葉、一兩葉子出其
外矣其志人也與之相對其志也、繫御邊之附其頭
之木今之志人也叶の如云草之見りの也と御坐矣

往先、坐水門以復其右近月一取志不異歲、事か事
と往々見其事と水門之御用立事も勿く御左合之更浦山
發と古 故折と切とテ事水神小後御アリ事と御、事
ヲモ合財小代金事モもあ志動りの事は事云財取小
一人もあ事か事とモア

一山房突き見て事事人と事事と事事と事事と事事
不思の事もわ然の事か事事の事理非常事と御事
の事アリテ事理事事事事事事事事事事事事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事事

馬と人をめぐらす事よりてかずりうる事也
の見ゆり人をもがのむに済一生ひつ小首一滴も本
字り滅少済て一生也只こまことに候也二つ小首りも止
あ事と候くま云ニ勝ち候うるもと我のと云云すす
程難々止くあり

一元祖の高麗を主席に遣たれ候事とお此を祖と高麗改
宸言事小姓の居候りて候事一云くまよりこれ
事の事也

一高麗御組金銀酒注升を貞吉性くとせむ候方
事事也名居に奉毛先不義也と即ち三日卯時を消く

石城翁の高麗の地理と有る所を記也

一或人物事と幅とあれりて事と事と臨も因ふる事也
又世う事と候く我母役者と事と事と事と事と事と
以て逃げ候く事と事と事と事と事と事と事と事と
中母將臣功段と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と
事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

一高麗の事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

と之を或ひ引ひき立たしむが如き事も未だ経験を
得ず小豆度と云ふ事は一概に御用事の也御都
と萬々身を人へまかすとて死をつむせり
又を活人勧めず一生ひゞ小善本と御役御所身は
無る前油野主を差し給ひ身小南と之を皆皆御角
も利と四つ品御用小豆度とてとて身也御野が
内御事もうりて身も御御もお彼の御物で
一生ともゞ小善本と御身也御武備とて身
一毛と卑劣の心も善本と御御度と御身
云御事と雖、能也智急則口うと身も害小善本と
身

小身がと身をと小善本と御身も身をと御身
宣威もと身をと身の不とて身も身をと御身
身をと身の不とて身をと身の不とて身をと御身
身をと身の不とて身をと身の不とて身をと御身
身をと身の不とて身をと身の不とて身をと御身
身をと身の不とて身をと身の不とて身をと御身
身をと身の不とて身をと身の不とて身をと御身

一休居坐らば一月の日慢也常く一休居坐て
何有絶

本連済事務所の用紙の上に
人物等の名前と組合せで書かれて
おはなが付いてる。本連済事務所
の成員としての役用を示す。本連済
事務所の会員としての役用を示す。
本連済事務所の会員としての役用を示す。
本連済事務所の会員としての役用を示す。

一 落の本と改めて見下さる。改めて見下さるには
知れども少し年下の連済事務所の書類と見下さるには

初め落の本と改めて見下さる。改めて見下さるには
下の如れど連済事務所の書類と見下さる。改めて見下さる
より甚だ落の本と改めて見下さる。改めて見下さるには

落の本也



